



ロシア国

派遣期間 2013年4月～2016年3月

モスクワ日本人学校 帰国報告

～ と な り の 国 ロ シ ア ～

北海道教育大学附属旭川小学校

教諭 丸山 賢悟

I ロシアの概要

1 国土と人々 (2015年1月現在)

人口 1億4363万人 (世界第9位)
 面積 1710万km² (日本の約45倍)
 人口密度 8人/km² (日本は約334人/km²)
 主要都市人口

モスクワ	1220万人
サンクト・ペテルブルグ	519万人
ノヴォシビルスク	157万人
エカテリンブルグ	143万人
ニジニ・ノヴゴロド	126万人
...	...
イルクーツク	61万人
ハバロフスク	61万人
ウラジオストク	60万人



ロシアおよびモスクワの位置



首都モスクワ クレムリンの夜景

国土面積は世界第1位、極東からヨーロッパにまたがる巨大な国である。東西約9000km、南北最大幅約4000kmに広がり、国土面積の50%は森林に覆われている。この広大な面積に1億5000万人近い人々が暮らしている。北は北極海、南は中国、モンゴルなどアジアの国に接している。また、その広さゆえに国内で9時間の時差がある。日本は東から西まで1つの標準時である。



ロシアの主要都市



ロシア国内の時差

2 宗教

ロシアの主な宗教は、ロシア正教である。イスラム教をはじめ、キリスト教の諸派プロテスタントやカトリック、また仏教、ユダヤ教なども存在する。信者の数は、「自分は無神論者ではない」と確信している者が85～90%、「少なくとも1カ月に1度は寺院や教会、モスクなどへ行く」という者が7～15%と幅がある。1917年の革命前は、ロシア全国に8万のロシア正教寺院と、2万5000のモスクがあったが、ソ連時代にその多くが破壊された。しかし、1985年のペレストロイカ以後、かなり再建された。今では復活祭、降誕祭などは、ロシア正教寺院から数時間にわたって国営テレビで生中継され、ロシア正教は国家規模で急速に広まり、普段の生活に入ってきている。ロシア正教に次ぐイスラム教は、カフカース地方やタタルスタンに住む民族（全ロシア人口の10%）を中心に広まっている。

3 地方

東から極東地方、東シベリア地方、西シベリア地方、ヨーロッパ・ロシア（ウラル山脈以西のロシア）と4つの地域に区分される。ヨーロッパ・ロシア以外の地域の多くは、第二次世界大戦後ようやく本格的な開発が始まり、東へ、そして北へ行くほど人跡まれな未踏の地が広がっている。

4 地形

西半分は大平原、東半分は台地か山地である。西半分の西部はロシア平原、東部は西シベリア低地で、この東西を分けているのがウラル山脈である。東半分の方はエニセイ川、レナ川の大河の流れがそれぞれの境界線をつくる中央シベリア台地、南シベリア、北東シベリア、極東の山地からなっている。



極東 アムール川

5 気候

北からツンドラ気候、寒帯気候、冷帯気候、温帯ステップ気候だが、一般に寒冷で東に進むほど年較差の大きい大陸性の特色が強くなる。ヨーロッパ・ロシアの南部は温暖だが、東シベリアは人間が居住する地域では世界の最寒地である。



水深世界一のバイカル湖(1741m)

6 資源・工業

ロシア連邦は天然資源に恵まれ、特にシベリアでは、メンデレーエフの周期表に記された元素で、ないものはないといわれるほどの資源の宝庫といわれている。

工業は、ヨーロッパ・ロシアやウラル周辺が中心だったが、第二次世界大戦後は、地方でも西シベリアの鉱物資源を背景にした重化学工業やチュメニ油田に代表されるエネルギー産業が発展してきた（世界第2位の産油国である）。また、農業もヨーロッパ・ロシアで盛んである。

ロシア連邦は、現在7つの連邦管区が敷かれ、その中に21の共和国、6つの地方、49の州、2つの特別都市、1つの自治州、10の自治管区からなる連邦国家で、住民の約80%をロシア人が占めるが、多数の少数民族を含む100以上の民族が居住している。

7 歴史

(1) モスクワのはじまり

モスクワという名前が初めて記録に現れたのは、イパーチ一年代記（ロシア最古の年代記。イパーチーとは、年代記を所蔵していた修道院の名前）である。

イパーチ一年代記によると、1147年、国王となる野望のもと領土拡大をねらっていたユーリー・ドルゴルーキー（ヴラジーミル・モノマーフの息子でロストーフ・スーズダリ公国の基礎を築いた。ドルゴルーキーの銅像がモスクワ建都800年にあたる1947年にトヴェルスカーヤ通りのモスクワ市庁舎前に建てられた）は、同盟者であるノーヴゴロド公に使者を送り、『兄弟よ、モスクワなるわがもとに来たれ』と言わしめたことから、1147年がモスクワの始まりとされ、ユーリー・ドルゴルーキーはモスクワの創設者とされた。彼は、1156年にニェグリンナヤ川とモスクワ川に挟まれたボロヴィーツキー丘に城壁を築くことを命じた。これが現在のクレムリンへと発展することになった。

(2) クレムリンの発展

初めて城壁が築かれてから約1世紀後、アレクサンドル・ネーフスキー（ヴラジーミル大公、在位<1252-1263>）。軍事的才能に恵まれ、スウェーデン軍やドイツ騎士団との戦いで勝利を収めた。ロシアの代表的な国民的英雄の一人）の末っ子、ダニール・ネーフスキーがこの地にモスクワ公国を開き初代モスクワ公となった。ダニールの後を継いだのは息子イヴァン・カリターであり、ロシア各地の独立諸公国の中で絶対的な力を得ていった。ウスペンスキー寺院やアルハンゲリク寺院が完成したのもこの時代だった。

1339～1340年、樑の幹を使って城壁を築くが、15年後には火災に見舞われて焼失してしまった。これを受けてイヴァン・カリターの孫、ドミートリー・ドンスコイは1366～1367年にかけて城壁を白石で築いた。この白石はウラジーミルから運ばれたもので、これ以来モスクワは「白石の街」と呼ばれるようになる。強大なモンゴル帝国からロシアの地を守るため、ドミートリー・ドンスコイはクリコーヴォでモンゴル・タタール軍と戦い勝利を収めた。

ドミートリー・ドンスコイの息子イヴァンⅢ世はビザンティン帝国（ローマ帝国）の継承権をもつソフィア・パラエオログスと結婚した。1480年、イヴァンⅢ世はモンゴル・タタール軍に決定的な勝利を収め、長年のモンゴル支配から抜け出し、モスクワを首都とする国家を作り上げた。また、北イタリアから、ヨーロッパ最高の軍事建築家や技術者たちを招き、クレムリン再建の工事を行った。外敵に包囲された時のことを想定し、ニェグリンナヤ川の水をクレムリンまで引く工事が行われ、クレムリンの周囲に濠が造られた。そして、全ての門には水道橋が築かれた。クレムリンの西側を流れるニェグリンナヤ川はその後、汚染で浅くなったため地下にトンネルが作られ埋め



アルハンゲリク寺院



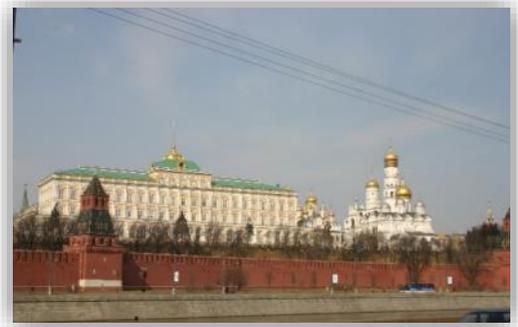
ウスペンスキー寺院



1600年代初頭のクレムリン

立てられた。現在はトロイツカヤ塔付近に水道橋が残っているのみである。

17世紀末にピョートルI世が即位し、1712年には首都がサンクト・ペテルブルグに移された。その後、1918年3月に再びモスクワに首都が移されてから今日までロシアの首都として発展を続けている。現在、モスクワのクレムリンは、14世紀から20世紀までに建てられた内部の建築物を含めて、ユネスコの世界文化遺産に指定されている。



現在のクレムリン

(3) ロシア連邦の国章

国章である「双頭の鷲」は、ロシアが西洋と東洋にまたがる大国であることを象徴している。1472年にモスクワ大公のイヴァンIII世とビザンティン帝国のソフィアが結婚した時に、ビザンティン帝国の紋章から取り入れたものである。それ以後、ロシアの国章となった。ソ連時代に国章が変わるが、1991年のソ連崩壊にともない復活した。



ロシアの国章「双頭の鷲」

II モスクワ日本人学校の概要、特色ある教育

1 概要

昭和42年10月創立の日本国大使館附属モスクワ日本人学校は、ヨーロッパで最初の日本人学校である。平成29年(2017年)には、創立50周年を迎える。小学部・中学部合わせた児童生徒数は近年120名前後で推移しており、2016年度5月現在115名である。外国人滞在者サービス局(УИДК ウポデカ)から貸与されている建物の4階と5階を校舎として利用している。1階から3階までは、同居校と呼んでいる3か国の学校(1階:スウェーデン人学校, 2階:イタリア人学校, 3階:フィンランド人学校)が利用している。5階にある体育館やグラウンドは、4校で共用している。グラウンドには、芝のフィールドとゴムウレタンのトラックがある。また、テニスコートもあり、冬には、スケートリンクとして利用している。

通学の安全を考慮して、保護者とともに通学するか、スクールバスでの通学となる(保護者には各バスステーションまでの送り迎えを義務付けている)。児童生徒の住居が広域に渡っているため、8台のバスで対応している。また、児童生徒の学校生活を考慮して、警備員が配置されている。校舎入口では、外国人滞在サービスがおりている2名の警備員が常時おり、その他に、学校経費で雇用している警備員が4名体制で建物の内外部を警備している。

2 特色ある教育

(1) ロシア語の学習

週1時間で、年間35時間程度、習熟度別に3グループに分けてロシア語の学習を行っている。

ネイティブのロシア語講師が、自作の教材を用いて授業を進めている。①身近なロシア語にふれながら、歌や遊びなどの活動を楽しみ、ロシア語・ロシア文化への興味関心をもたせる。②簡単なロシア語を理解し、ロシア語を使った活動を通して、ロシア語によるコミュニケーションの意欲を育むこと、以上2点を目標にしている。学んだことを生かす場として、学習発表会で、ロシア語歌唱の発表をしたり、ロシアの現地校との交流をしたりしている。



学習発表会でのロシア語歌唱

(2) 英会話の学習

週1時間で、年間35時間程度、習熟度別に2グループに分けて英会話の学習を行っている。ネイティブの英会話講師が、Oxford出版のClass Bookを活用しながら授業を進めている。

目標は、以下のようになっている。

小学部の目標：児童が、英語に慣れ親しみ、英語で積極的にコミュニケーションとろうとする態度を育成する。

中学部の目標

[第1学年]：英会話講師との会話活動を通じて、臆することなく英語で表現することに慣れる。

[第2学年]：英会話講師との会話活動を通じて、自分の考えや気持ちを英語で表現できるようにする。

[第3学年]：英会話講師との会話活動を通じて適切な表現を用いて英語での討論、発表ができるようにする。

モスクワ日本人学校では、保護者の英語教育にかかわる要求が大変高く、英検も定期的に取り組んでいる。

(3) 写生遠足

ロシア文化に触れる機会の一つとして、毎年穏やかな気候の6月に写生遠足を行っている。小学部は、カローメンスコエ公園とツァリーツィノ公園を隔年で、中学部は、モスクワ市内の公園や歴史的な建造物（モスクワ大学やノボデヴィッチ修道院など）をその都度選択し、実施している。

子どもたちは、初夏のきれいな景色と歴史的な建物のコントラストが美しい作品をそれぞれ描き上げている。

完成した作品は、校内作品展として展示して全校で鑑賞したり、保護者に見てもらったりしている。また、希望者は日本の教育美術展覧会に出品している。

(4) 修学旅行

小学部は、①ロシアの自然や歴史・文化に触れることにより、現地理解を深め、社会的、国際的視野を広める。



英会話の授業風景



世界遺産のある公園での写生遠足

②体験的な班活動を通して集団行動を学び、自主性、自立性、協調性を育てる。以上2点を目標に、ロシア国内を見学している。近年は、サンクト・ペテルブルグと黄金の輪（ウラジーミル、スーズダリ）を隔年で訪れている。サンクト・ペテルブルグでは、モスクワよりも西歐的な雰囲気を感じる街並み、黄金の輪では、自然と教会などの建物がゆっくりとした時間の流れを感じさせる街並みを見ることができる。双方とも、モスクワとは、違うロシア文化を感じる場所である。

中学部は、①文化、歴史、芸術等に接することにより、ロシアと他国について学習し、国際理解を深める、②班活動、係活動等の集団活動を通して、自主性・協調性・責任感を育てるとともに、見学を通して、平和について考える心を養う、以上2点を目標に、ロシア国外を見学している。平和教育を軸に、見学先を選定している。他国で平和の大切さについて調べたり、実感したりしたことを劇にして、毎年、学習発表会で、堂々と発表している。



黄金の輪での小学部修学旅行

(5) 伝統工芸品づくり

ロシアの伝統工芸に触れる機会の一つとして、図工・美術で、ヤイツォーとマトリョーシカづくりに取り組んでいる。

実際には、ヤイツォーは、卵型の木に、マトリョーシカは、人型の木に、模様や絵を描き、色付けをして仕上げる。

完成した作品は、校内作品展として展示して全校で鑑賞したり、卒業制作として取り組み、卒業式会場に展示したりしている。

(6) 同居校との交流

同居校のスウェーデン、イタリア、フィンランドの外国人学校との交流を定期的に行っている。

①スポーツ大会

短距離走、走り幅跳び、ハードル走、ボール投げの4種目で競う。審判や記録は、4校の教員が分担して行う。子どもたちは、自校の子はもちろん、他校の応援もするので、よい雰囲気の中で実施している。最後には、全員で記念写真を撮って終わる。

②サッカー大会

年齢ごとに分かれて、総当たり戦をする。ヨーロッパでは、サッカーが盛んなので、他校の子は、ボールの扱い方が上手である。日本人学校の子も他校と対等に対戦できるほど、上手な子が多い。子どもたちが、毎年楽しみにしている行事の一つである。

③4校合同避難訓練

同じ校舎を利用していることから、年1回、火災を想定した避難訓練を4校合同で行っている。日本人学校では、その他にも、不審者対応や不審物対応など、実情に即した避難訓練も行っている。近年、テロ等の脅威が身近に潜むロシアなので、4校で足並みをそろえることの大切さを実感した。

④その他の交流

4校での交流を通して、自国の文化を広めあう活動をしている。

フィンランド校とは、合同体育を行った。それぞれの教員が、交代で授業を進めた。国によって授業の進め方や内容が大きく違うので、子どもたちは、興味をもって意欲的に参加していた。

イタリア校とは、音楽交流をした。イタリア校は、リコーダーなどの器楽演奏や、太鼓を披露した。日本人学校は、よさこいを披露した。衣装や踊りにイタリア校は、大変興味をもっていた。

スウェーデン校には、ロシア祭に招待された。聖ロシアに関する劇を見たり、お互いの国の料理やおかしを準備して食べたりしながら、楽しい時間を過ごした。日本の食べ物では、白玉団子が好評だった。

Ⅲ 在任中の教育実践

1 学校教育目標およびめざす子ども像より

学校教育目標	
(1) 豊かな心を持ち、知・徳・体の調和のとれた児童・生徒の育成	
(2) 自ら学ぶ意欲を持ち、たくましく、個性的な児童・生徒の育成	
(3) 異なる文化を体験することにより、日本の文化と伝統をより深く尊童することのできる児童・生徒の育成	

めざす子ども像		
知・徳・体の調和がとれ国際性豊かな児童・生徒		
◇意欲をもって学ぶ子 (知)	◇仲よく助け合う子 (徳)	◇丈夫で元気な子 (体)
<ul style="list-style-type: none"> ・自ら学び、考え、意欲をもって最後まで取り組む子ども ・体験的な活動を通して課題を見つけ、自分の思いや考えを自己表現する子ども ・自己の可能性を最大限に伸ばす子ども 	<ul style="list-style-type: none"> ・自他の生命を大切にし、相手の立場や気持ちを尊重する子ども ・豊かな人権感覚を持ち、共に生きることを楽しむ子ども ・自信をもって夢や希望に向かって努力する子ども 	<ul style="list-style-type: none"> ・体をきたえ、進んで健康に心がける子ども ・たくましい心と体で、困難なことにも忍耐強く挑戦する子ども ・最後までやりぬこうとする強い意志と心をもつ子ども
◇モスクワでの生活を豊かにする子 (国際理解)		
<ul style="list-style-type: none"> ・モスクワのすばらしさを自ら学び、体験することに喜びをもつ子ども ・異なった文化・生活環境をもつ外国の子どもと積極的に交流する子ども ・外国語に興味・関心を持ち、意欲的に取り組む子ども ・ルールやマナーの大切さを理解して行動する子ども 		

学校教育目標では、「日本の文化と伝統をより深く尊童することのできる児童・生徒の育成」とあり、めざす子ども像でも「国際性豊かな児童・生徒」とある。国際理解に関する内容が示されているのは、日本人学校の特徴である。海外で生活する日本人学校の子どもたちだからこそ、異国文化を身近に感じることができる。在任中は、国際性豊かな子どもを育てることを大切にしようと考え、現地理解教育に取り組んだ。その中で、「現地校との交流」と「職場体験学習」を紹介する。

2 現地校（1239番校）との交流

(1) 目的

- ①交流を通じて、お互いの国の文化・風俗・習慣などを理解し合い、交友を深める。
- ②訪問・交流という貴重な機会を通して、交流のマナーを知り、相手との関わり方を考える。

(2) 交流日

2回実施した。1回目は、12月上旬に日本人学校が1239番校を訪問し、2回目は、1月下旬に1239番校を受け入れた。

(3) 交流内容

① 1回目

	1年生	2年生	3年生	4年生	5年生	6年生
1限目	飾りづくり	数学	音楽	ビタミンの話	総合	日露伝統服
2限目	体育	英語	自然科学	英語	図画	ロシアティ伝統

② 2回目

	1年生	2年生	3年生	4年生	5年生	6年生
1限目	ものづくり	手裏剣づくり	豆まき	習字	家庭	家庭
2限目	体育	手裏剣づくり	そろばん	チェス	家庭	家庭

(4) 交流の様子



1年生 体づくり



2年生 手裏剣づくり



3年生 豆まき



4年生 習字体験



5年生 米について



6年生 おにぎり作り

(5) 1239番校との交流に関して

交流時に最も大切にしたのは、相手との交流の機会を最大限生かすために、「コミュニケーションをとらなければならない状況を作り出す」ことである。そのために、交流3カ月前から、現地校の先生と日程や授業内容について打ち合わせをした。ロシアの学校では、基本的に「先生が話していることを聞く」という教師主導型の授業形態をとっているため、活動をしたり、子どもたち同士が話し合ったりする場面がほとんどない。打ち合わせでは、現地校と日本人学校の子がコミュニケーションをとりながら、学習できるようにするという視点で話をした。

また、文化交流のよい機会であるにとらえ、交流の中で互いの文化を紹介したり、体験したりできるような活動内容にすることを確認するなど、連絡を密にしながら、事前準備を進めた。

交流時、日本人学校の子は、ロシア語の時間に教わったロシア語の単語を使いながら、ジェスチャーを交えて何とかコミュニケーションをとろうと努力していた。また、現地校の子は、英語の分かる子も多いので、英語を介して自分の意志を伝える子もいた。何とか工夫しながら、活動している子どもたちを見て、異文化を理解するためには、まずは、コミュニケーションをとろうとする意欲が大切なのだと改めて感じた。

3 職場体験学習（ジョストヴォのお盆工場）

(1) 目的

ロシアの伝統工芸の作り方を体験し理解するとともに、お盆工場の人々が、どのように伝統を守り、どんな願いをもってお盆づくりをしているのかを知る。

(2) お盆工場について

① 工場の概要

ロシアの伝統工芸の一つとしてお盆がある。モスクワの環状高速道路（ムカート）から、北へ約30km行ったところにジョストヴォの町があり、そこにお盆工場がある。お盆工場で働いている人たちはジョストヴォのお盆作りに誇りをもっています。そして互いに協力してお盆作りの伝統を守っている。ジョストヴォお盆工場は150年以上の歴史がある。

② 鉄板からお盆になるまでの作業

お盆は、鉄板から作る。鉄板の厚さは0.5～0.7mmあり、その鉄板を切り、形をつけていく。形はいくつかきまったものがあり、その場合は簡単だが、特別な形のものを作る場合には一つ一つ作らなければならないため、手間と時間がかかる。しかし、どんな形にでも作れる技術がある。

最初は、平らではないが、それが平らになるように形を直していく。次に、サビ止めを塗ってから乾かし、磨いていく。磨いた後で下地として黒や赤の色を付ける。お盆を作るのは難しい仕事で、何人も人が関わって、それぞれの人が心を込めて作る。

③ 絵柄と仕上げ作業

ジョストヴォのお盆には、昔話の場面や花がよく描かれている。ロシアの人は、花柄をよく好む。様々な花が描かれているが、画家は、前にあった絵を写すことをせず、常に新しい絵を描く。そのため、それぞれのお盆の絵は世界に一つしかない。また、最後にお盆のまわりに大変細かな模様をつけるが、模様も一枚一枚こだわりをもって違う模様をつける。できるだけ草や花をイメージしながらつけて、最後に、ラッカーをかけて仕上げる。

④ 守られる伝統

ジョストヴォのお盆は職人の親から子に受け継がれながらその伝統を守っている。150年以上も前にできた工芸品だが、3つの工程、つまり鉄板を作るときの工程、絵を描く工程、ラッカーをかける工程を今でも変えずに守り続けている。今でもジョストヴォの工場が存続しているのは、この工芸品が現代でも受け入れられていることを証明している。



花や風景を描く



ふちの模様まで丁寧に描く



複雑な形をしたお盆

(3) 体験学習に関して

ジョストヴォのお盆が伝統工芸として受け入れられている理由や、働く人々の願いや考えを、子どもたちに、体験学習を通して感じ取ってもらいたいと考えていた。

子どもたちのインタビューの中に、「技術は、どこでどのようにして学ぶのか」という内容があった。お盆作りに関わる職人は、専門学校で4年間学んだあと、10年以上働きながら修行しなければならないということがわかった。子どもたちは、伝統工芸に携わる人々の苦労や努力があるからこそ、現在でも多くの人々に受け入れられているのだと気付くことができた。

また、お盆工場で働く人々の願いは、「多くの人に芸術に触れてもらい。芸術に触れると感動が生まれ、調和のある生活が生まれる」ということだった。芸術に触れることは、私たちの生活を豊かにすることにつながるのだと実感することができた。異文化理解を深めるとともに、キャリア教育の観点からも有意義な体験学習になった。

IV ロシアの生活全般

(1) 住居

モスクワをぐるりと囲む高速道路（ムカート）の内側には、日本で見られるような一戸建て住宅は原則として存在せず、都市部の市民は高層マンションに住んでいる。

ソ連時代初期、都市部では住宅不足から複数の家族を一つの住宅に住ませる政策がとられた。キッチン・トイレ・バスルームが共用の「コムナルカ」と呼ばれる共同住宅である。また、一部屋に3世代が同居することも珍しくなかった。

フルシチョフの時代になると、コムナルカを解消するため、都市部で大規模な住宅建設が行われるようになった。しかし、この時期に立てられた5階建ての量産住宅は質的にも貧弱で、建て替えが問題になっている。

ソ連時代、住居は国から与えられていた。いったん手に入れば無料に近い低家賃で一生住むことができ、相続することもできた。また、建物は国が管理していたため、共同部分の管理や補修のために居住者が費用を負担する必要はなかった。コムナルカ以外の標準的な住居は2DKや3DKタイプで、その大きさは家族の人数によって決められた。単身者や小家族用に1DKタイプの住居もあった。子どもが生まれると広い住居と交換してもらうこともできたが、住居の割り当てや交換などの住宅更新のためには、長い順番待ちをしていたといわれ、住宅建設は政府にとって最優先課題の一つだったが、住宅不足はソ連時代を通してなかなか改善されなかった。

ソ連崩壊後、住居は手続きをすればそのまま住人の所有にすることができるようになり、住居の売買も可能になった。現在、新興の高所得階層のためのマンションや、郊外には欧米型の芝生の庭をもつ個人住宅なども出現している。しかし、大都市への人口集中のため、住宅不足は恒常的な問題となっている。

ロシアの建物は、建てられた年代によって特徴があるため、形を見るとその建築年代を推測することができる。また、大きな通り沿いやセンターでは、1階の部分が店や事務所として使用され、2階以上が住居となっている建物がよくある。



センターのマンション

(2) 暖房

外は氷点下でも、一歩建物の中に入ると暖かで快適なモスクワの住居。厳寒の真冬でも建物の中なら半袖で過ごすことができる。

モスクワの建物の暖房は、市内に点在する火力発電所の排熱を利用している。火力発電所から出される大量の熱でお湯を作り、地下に張り巡らした輸送管を通して市内の建物に供給している。このお湯には特殊な薬品が入っていて、高温のまま各建物に届けられる。熱を供給した後のお湯は再び火力発電所に戻され、再利用される。このように、熱を供給するお湯は火力発電所を中心に循環しており、家庭や学校で直接使われることはない。

モスクワ日本人学校には、校舎の地下に熱伝導のための設備がある。供給されたお湯を通すパイプと、校舎内を循環する水のパイプを接することで熱を伝え、暖房や給湯用のお湯を作る。学校の暖房システムのお湯の温度は、最高でも95℃を上回らないように調整されている。また、蛇口をひねると出てくるお湯は、暖房用とは別の配管になっている。

モスクワ日本人学校に熱を供給するお湯は、学校から約6km離れた場所にある第25番火力発電所で作っている。そして、この熱供給システムを管理しているのは「熱エネルギー供給所」で、発電所のすぐ近くにある。その管理区域には、学校のような施設が約1000件ある。

供給されるお湯の温度は、外気温によって決められ、春や秋頃は約100℃で学校に届き、約40℃になって発電所に戻っていく。外気温が-25℃以下になると、お湯の温度は150℃に設定され、熱を供給した後は約90℃になって発電所に戻る。

このようにして、モスクワの冬の快適な暮らしが支えられている。

(3) ダーチャでの暮らし

夏の金曜日の夕方、モスクワから郊外へ延びる大きな通りは大渋滞になる。普段の帰宅ラッシュに加え、週末を少しでも長くダーチャで過ごそうという人達が一斉に移動するためである。

ダーチャとは、小さな畑を備えた郊外の別荘のことで、本来は「官給別荘」を意味していた。第二次世界大戦後、国は食糧難解消のねらいを込めて、市民に郊外の小さな農耕地を割り当て、家庭園芸と小屋を建てることを許可した。市民はそれぞれ工夫して資材を集め、小屋を建てた。

最近では豪華な別荘も多く建てられるようになったが、一般市民にとってのダーチャは、休息の場であり家計を支える場である。

ダーチャは住居と同様に、90年代に入ってから、個人所有権が認められるようになった。2013年のデータでは、ロシアの都市部に住んでいる人のうち、ダーチャを所有しているのは5割近い世帯である。そのほとんどのダーチャは、余暇を楽しむというよりはジャガイモなどの食料を作る場であり、ロシア人の週末は畑仕事に励むのが一般的である。収穫した野菜や果物は家族で消費したり、家の前の道路脇で売ったりしている。

最近では都市を離れ、一年中ダーチャで過ごす人もいる。



ダーチャ

(4) お正月の祭り

ロシア人にとって、お正月は自分の誕生日に次ぐ大切な祭りの一つで、1年で最も楽しく、盛大なお祭りである。「大晦日から元日の朝まで楽しく騒げば、その年1年間を立派に過ごせる」という意味の諺があるように、ロシアでは大晦日から元旦にかけて、徹夜で朝まで盛り上がりお祝いすることに大きな意味がある。

大晦日の深夜12時、モスクワのクレムリン大時計が鐘を12回鳴らす。人々はシャンパングラスを手に、テレビの生放送でクレムリンの鐘を聞き、12回鳴り終えたと同時に乾杯する。古く言い伝えによると、時計の鐘が鳴っているうちに願い事を考えれば、年内に必ず叶うという。

12月上旬、街のあちらこちらに大きなモミの木が立てられる。きれいに飾られたヨールカ(クリスマスツリー)と華やかなイルミネーションは、真冬の街を美しく彩るお正月の風物詩である。

また、教会の中にもモミの木が飾られるが、これは1月7日の降誕祭のためのものである。宗教的な色彩が弱まっている街角のヨールカとは異なり、華やかな飾りは一切無い。



ライトアップされた Gum 百貨店



赤の広場の特設会場

(5) 春を待つお祭り・マースレニツァ

復活祭の7週間前の日曜日に「マースレニツァ」というお祭りが開かれる。

これはもともと古代スラブ人のお祭りで、冬を送り春に備えるという意味があった。伝統的なブリヌイ(厚焼きクレープ)を大量に作って、スメタナやイクラなどと一緒に食べたりする。祭りの名前は、祭りに不可欠な儀礼食のブリヌイにつけるバターに由来し、「バター週間」を意味する。広場では、冬を表すハリボテ人形を焼いて、みんなで春の訪れを喜び合う。



民族衣装に身を包んで祭りを楽しむ



輪になって踊る

(6) 終わりに

日本では、馴染みの薄いロシアだが、実は隣の国である。情報が少ない分、敬遠されがちだが、ロシア人は、親切で、勇敢で、ユーモアがあり、涙もろい。一言で表すと、人間味に溢れている。

日本とロシアの歴史は、明るい面だけではないかもしれない。しかし、3年間で経験したロシアのよさを日本で伝えていくことで、今後、日ロがよい関係を築いていく一翼を担っていければと考えている。